宋・元・明代の禅院における僧堂の変容

鈴木智大

一、はじめに

日本の禅院における僧堂は、禅宗特有の生活形態を反映する堂宇であり、現存する東福寺禅堂をみると、その規模、形態とも他に例をみないものとなっている。中国においては現存遺構はないものの、南宋代の姿は「五山十刹図」「大宋諸山図」などとして日本に伝えられている。[1] 例えば五山の二位に列せられる霊隠寺の伽藍（図1）をみると、仏殿の西に内堂と外堂からなる僧堂が位置する。規模については正確な描写をしているものではないが、中軸線上に位置する仏殿や法堂などよりも大きく描かれ、内部の床の構成など細かな描写がなされることなど、伽藍の景観の上でも重要な要素であることがうかがえる。そして北宋代の僧堂においては、衆僧が坐禅、食事、睡眠などの生活をおくっていたことが『禅苑清規』などより知られている。[2]

僧堂において衆僧が坐禅、食事、睡眠などをおこなうことは、南北朝期の日本においても確認することができる。[3] しかし日本の禅院では、当初、僧堂で行なわれていた坐禅、食事、睡眠という行為が、やがて別の建物でそれぞれ行なわれるようになる。遅くとも、十五世紀前半頃にはその例が見られる。[4] そしてこのような生活形態の変化が伽藍の構成にも変化をもたらし、大規模な僧堂が新たに建てられることはなくなった。このような変化が日本独自のものであるのか、それとも中国も含めた禅宗における潮流であったのか。

既往の中国禅院の建築に関する記述の多くは南宋期を中心に描かれており、明代以降の禅院の伽藍を知るために十分な研究の蓄積がなされていないのが実情である。そこで本稿においてはこの点を明らかにすることで先の問いに答えたい。

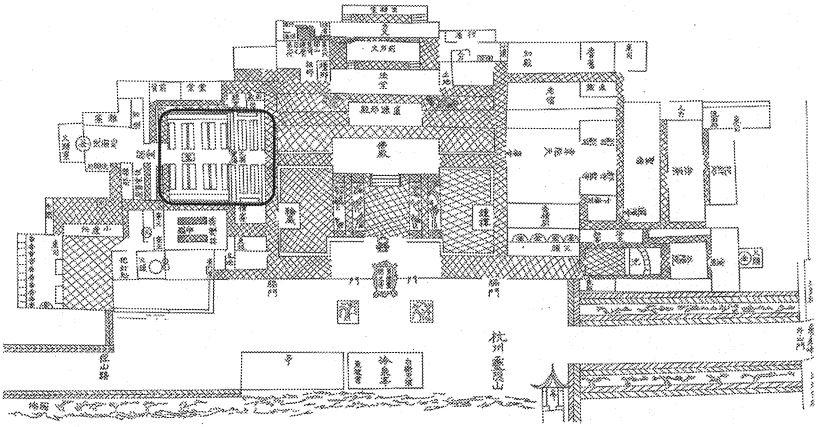

図１　「大宋諸山図」霊隠寺伽藍図起し（線で囲んだ部分に僧堂が位置する。なお本図は『五山と禅院』所収の図に筆者が手を加えたものである）。

二、既往研究について

明代以降の禅院の伽藍に関する研究の蓄積は少ないが、既往研究においても時代を越えて伽藍の変化を論ずるなかで言及されてきた。横山秀哉氏は、江戸時代の黄檗宗における禅堂、食堂、寮舎の分立を指摘し、明末、清初の形式が日本に伝えられたとする。さらにその影響から、臨済宗、曹洞宗においても、同様の形式が成立したと推測している。[5] ただし明代以降の状況について直接的な言及はない。

最も積極的な論証として、挙げることができるのは、戴俠氏により南京の霊谷寺における禅堂、斎堂の分立の指摘のみである。[6] 張十慶氏も、南宋禅院の配置の基本形式について述べるなかで、明代の禅院の配置として青溪鷲峰寺・鳳山天界寺・鶏籠山鶏鳴寺を取り上げ比較している。[7] ただしどの記事から、どの時代の様子を復原したのかは具体的に記されていない。示された模式図（図2）から推測すると、明の萬歴三十五年（一六〇七）南京僧録司より刊行された『金陵梵刹志』所収の図（図3）を根拠にしたと考えられるが、論証が不足しているといわざるを得ない。[8] その一方で戴氏の指摘した霊谷寺については言及されていない。

以上の研究状況を踏まえ、本稿においては宋代以降、主に明代の禅院における僧堂のあり方について、個別事例を取り

上げる。具体的には寺志および渡海した日本僧の日記などから、明代初期に首都がおかれた南京と交通の要衝にある鎮江の禅院の姿を明らかにする。

大刹凤山天界寺：

	东方丈	毗卢阁	西方丈	
禅堂院		僧录司		
	祖师殿		伽蓝殿	
		三圣殿		
钟楼				库司
	轮藏殿	大雄宝殿	观音殿	
		天王殿		
		金刚殿		

図2　『中国江南禅宗寺院建築』47頁所収の天界寺伽藍の模式図。

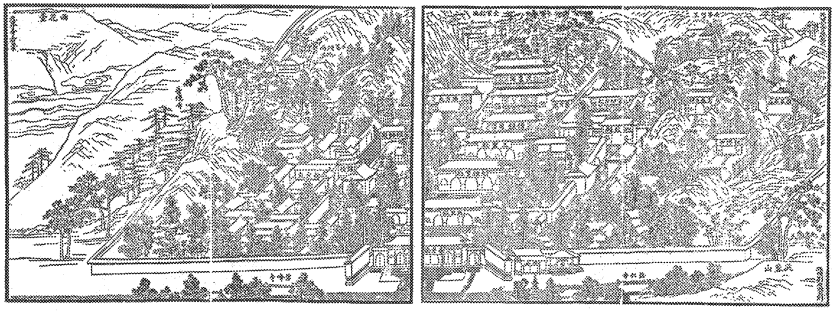

図3　『金陵梵刹志』所収天界寺伽藍図

三、南京の禅院

まず明代初期に都がおかれた金陵（現・南京）の禅院について、『金陵梵刹志』からみることとする。『金陵梵刹志』は葛寅亮が撰し、明・萬歴三十五年（一六〇七）南京僧録司より刊行され、天啓七年（一六二七）序文が補われた。[9] 南京にある大刹三ヶ寺、次大刹五ヶ寺、中刹三十二ヶ寺、小寺百二十ヶ寺、他百ヶ寺余の寺志が収録されている。南京は明の太祖・朱元璋が　至正十六年（一三五六）に国都とし、永楽十九年（一四二一）に永楽帝が北京に遷都すると副都とされた。本稿では大刹の中から、比較的詳しく伽藍構成について言及される天界寺と霊谷寺の二寺を取り上げる。

三―1．天界寺

天界寺は天暦元年（一三二八）元の文宗が潜宮を捨て寺としたことにはじまり、翌年、杭州中天竺寺の笑隠大訢を請して開山とした。至正十七年（一三五七）勅により寺名を大天界寺と改められ、さらに洪武元年（一三六八）天界善世禅寺と改称され、五山の上に昇格された。

まずは創建当初の伽藍がどのようなものであったか寺志に収録される碑文から確認しておこう。元の翰林学士をつとめた虞集（一二七二―一三四八）が撰した「龍翔集慶寺碑」には次のように記される。[10]

・・・又明年〔至順元年〕正月朔日壬午之吉乃建立焉、其大殿曰大覚之殿、後殿曰五方調御之殿、居僧以致其道曰禅宗海會堂、居師以尊其道者曰傳法正宗之堂、師弟子之所警發瓣證者曰雷音之堂、法寶之儲曰龍蔵、治食之處曰香積、鼓・鐘之宣、金穀之委、各有其所繚以垣・廡、闢之三門、而佛・菩薩・天人之像設纓盖床座嚴飾之具華燈・音樂之奉與凡所宜有者皆致精備以稱上意、・・・

（〔　〕内は筆者注。以下、同様）。

これによると至順元年（一三三〇）に建立されたのは、大覚之殿と呼ばれる大殿、五方調御之殿と呼ばれる後殿、禅宗海会堂と呼ばれる僧が居して道を致す堂、伝法正宗之堂と呼ばれる師が居し道者を尊ぶ場、雷音之堂と呼ばれる師弟が警発、弁証する場、龍蔵と呼ばれる法宝を蓄える場、香積と呼ばれる食を治めるところ、そして鼓・鐘の建物、金穀の倉庫が建ち、各々垣・廡がめぐり、三門が開かれる。つまり、二つの仏殿、僧堂、方丈、法堂、経蔵、庫院、鼓・鐘楼、倉庫といった構成であると解釈できる。先に見た「大宋諸山図」と対照しても共通した建築の類型である。

つづいて明代の天界寺について見てゆくが、まず太子少師の姚廣孝（一三三五―一四一九）が永楽二十二年（一四二四）八月に撰した「天界寺毘盧閣碑」には次のようにある。[11]

天界善世禪寺舊在京城闤闠中、洪武二十一年戊辰二十一日、寺灾、・・・（中略）・・・佛氏以清浄・寂滅爲教建立佛刹、不宜于城市闤闠中與民居混穢濁・喧囂・佛靈、雖無有礙僧徒禪誦有妨、宜徒於虛曠・閒寂之地、僧得安於禪誦、而無延燎之患庶乎稱其　也、・・・（中略）・・・不三年而、門廡・殿堂・庫廈・庖湢、於所宜有者皆具、惟毘盧閣・旃檀林闕、然寺成其額依舊所、賜曰天界善世寺、宇之　灑開廊比舊倍焉、・・・（中略）・・・〔永楽〕六年戊子夏四月首建旃檀林、屋計若干楹間爲衆僧習誦・休息之所、八年庚寅募縁創造毘盧閣、・・・（中略）・・・十四年丙申又建方丈二所基于閣之両備相對翔峙山林・・・（中略）・・・永楽二十二年八月

これによれば、京城中にあった天界寺は、洪武二十一年（一三八八）に罹災したのを契機に寺地を城外へと移転した。三年足らずで、門廡・殿堂・庫廈・庖湢などを備えており、毘盧閣、旃檀林は遅れて建立され、その後方丈が二ヶ所に設けられたことが確認できる。

つづいて『金陵梵刹志』を撰した葛寅亮による「八大寺重修禪律堂及贍田碑記」には次のようにある[12]。

此　国初、禪堂之設、明教攝心第一義也、邇者寺僧各立門戸、梵唄稀聞觸蠻時競、已失千僧一釜之舊、即有數椽僅存遺制、・・・（中略）・・・萬暦参拾五年陸月

ここでは明国（一三六八―）の初めに禪堂を設けた意義を説く。ここで注目したいのは「禪堂」とよぶことである。おそらく「龍翔集慶寺碑」の「禪宗海會堂」のように僧が居するところであったものから変化していると推測できる。さらに近頃は寺僧が各々門戸を立て、すでに千僧一釜の旧制はすでに失われており、数棟[13]がわずかに遺制をのこしているとする。つまり多くの僧が同じ食事をとる、一緒に暮らすという生活形態に変化があったことを知ることができる。

この史料はあくまで萬暦三十五年（一六〇七）のものであり、明代初期の実態を表しているものとはいえない。ただし、萬暦年間においてこのような状況があり、その端緒を明の初めとする当時の認識を知ることはできる。

三―2．霊谷寺

霊谷寺は天監十三年（五一四）梁の武帝が宝誌を追悼するため建立したことにはじまるとされる。こちらも天界寺と同じく虞集による碑文から元代の伽藍の様子を知ることができる。至順二年（一三三一）に撰された「鍾山太平興国禪寺碑記」である[14]。

・・・以泰定乙丑之歳〔二年〕正月來至於是邦而寺適災天意、若曰其撤舊而作新之乎、・・・（中略）・・・一

歳垣廡成、再歳屋室具其可以名書者曰方丈、曰北山閣、曰經樓、曰香積、曰水陸堂、曰白蓮堂、曰伽藍祠、曰大僧堂、曰道林堂、曰新倉院、曰耆宿之舍、而大宏興鐘三門、皆以上賜次第而成、・・・至順二年九月日

これによると霊谷寺は元の泰定二年（一三二五）に罹災し、翌々年の伽藍として、方丈、北山閣、経楼、香積、水陸堂、白蓮堂、伽藍祠、大僧堂、道林堂、新倉院、耆宿之舍、三門が列挙されている。この碑文が撰された時期を考えると蓋然性のある情報といえるだろう。注目したいのは大僧堂の存在である。これを踏まえて次の史料を見たい。

戴倹氏は僧堂の分化現象の一例として、次の杭州府学教授をつとめた徐一夔による「奉勅撰霊谷寺碑」[15]を取り上げた。

・・・以〔洪武〕十四年九月之吉、中作大殿、殿之前東爲大悲、殿之西爲經藏殿、食堂在東、庫院附焉、禅堂在西、方丈近焉、而大殿之後則爲演法之堂、志公之塔則樹于法堂之陰、其崇五級、復作殿附塔、以備禮誦、左右爲屋以棲僧之奉香火者、翼以兩廡其壁則繪佛出世・住世・涅槃及三大士・十六應真・華梵・神師示現之迹、屏以重門、繚周垣、而養老宿與待雲水之暫到者、亦各有其所至于井・竈・湢・廁之類、凡禅林所宜有者無一不備、而其爲制以佛之當獨尊也、故於正殿、則奉去見未來之像、其它待衛天神不與焉、以禅與食不可混於一也、故食堂附於庫院、以師之不可遠其徒也、故方丈近於禅堂、・・・

（中略）・・・洪武十六年月日

ここでは洪武十四年（一六八一）の伽藍を構成する建築として、大殿、大悲（殿）、経蔵殿、食堂、庫院、禅堂、方丈、演法之堂（法堂と同じか。）、志公之塔などが列挙され、「鍾山太平興国禅寺碑記」に記された伽藍と異なる構成であることが確認できる。特に「鍾山太平興国禅寺碑記」に挙げられていた大僧堂がここには記されず、新たに禅堂、食堂が挙げられるようになったのは注目すべきである。そしてこの伽藍の構成について、禅と食を混ぜないために、食堂を庫院につけ、師をその徒から遠ざけないために、方丈を禅堂の近くに建てるという記述が続く。つまり、禅と食が混然としていた大僧堂を、食堂と禅堂に分立させ、食事を整える場である庫院を食堂につけ、住持が暮らす方丈と禅堂を近づかせたと捉えられる。

四、鎮江の禅院

鎮江は南京と蘇州の間に位置し、北京へと通ずる大運河と長江の交差点にあり、揚州と南北に相対する。交通の要衝に位置していることもあり、日本からの渡海僧もたびたび訪れており、彼らが残した史料から禅院の伽藍を知ることも可能

である。本項においては鎮江に位置し、ともに甲刹に列せられている金山寺と焦山寺を取り上げる。

四―1．金山寺

金山寺の開創には諸説あるが、宋代においては佛印了元などが住持を務めており、重要な位置にあったことが知られる。[16] また『扶桑五山記』などからは官寺制度のもと五山、十刹につぐ甲刹に列せられていることがわかる。また清代には避暑山荘に金山寺を模したものが建立されていることも、その重要性を物語る。[17] 現在は、長江の流れが変わり陸続きとなっているが、かつては島であった。

まず、清の乾隆年間に刊行され、光緒二十六年（一九〇〇）に重刊された『金山志』「大徹堂」の項に注目したい。[18]

大徹堂、即今方丈、在大雄殿右、昔名古曉堂。宋釋克勤一夜悟十八、僧遂更名大徹。有井在堂之西。

大徹堂は、今は方丈で大雄殿の右にあり、昔の名を古曉堂といった。そして宋の圜悟克勤（一〇六三―一一三五）が悟り、大徹堂と名が改められたという。また井戸が堂の西にあるという。つまり昔は方丈と異なる類型の建物であったことが知られるのであるが、いかなる類型であるのか具体的には示されていない。ただし、この変容について日本の僧侶が記した史料から明らかになる。

南宋の五山を記したものとして知られる「五山十刹図」「大宋諸山図」には、寺院建築に掛けられていた額が「諸山額集」として建築類型別にまとめられている。その「僧堂額」の項には「大徹堂金山」と記される。つまり金山寺の大徹堂は、当時、僧堂であったことがわかる。

ここで、若干、時代を遡る。京都岩倉大雲寺の寺主であった成尋は、天台山・五臺山の巡礼を目指し、延久四年（一〇七二）に入宋した。本人は後に中国で示寂することとなるが、延久五年（一〇七三）に帰国した弟子たちにその際の日記『参天台五臺山記』を託した。[19] それによれば、成尋は杭州において、鎮江の金山寺には行くことを勧められ、[20] 実際に訪れ、その伽藍を次のように記している。[21]

・・・大佛殿丈六釋迦像。諸堂十餘所。巖洞塔婆最以甚妙。一切經藏寔可貴重。僧堂置鉢。寢所置衾、或二領三領八十餘所。其外房々皆以優美。看經院内八十餘人各居經先讀一切經。泛海樓内有等身釋迦像。如今日見第一莊嚴寺也。・・・

この記事からは、成尋が訪れた当時、大仏殿のほか十余りの堂宇がたち、その中には一切経蔵などとともに、すでに僧堂があったことが知られる。また鉢を置くという描写からは僧堂の食事の場としての役割を見ることも確認できる。

また日本の禅院に目を移すと、建長寺の僧堂が大徹堂と呼

ばれていたことが、元弘八年（一三三八）の作製とされる「建長寺指図」（図4・5）[22]から明らかになる。僧堂を大徹堂と呼ぶ例が金山寺以外にも確認できるとともに、その情報が日本にもたらされていたことが推測できる。

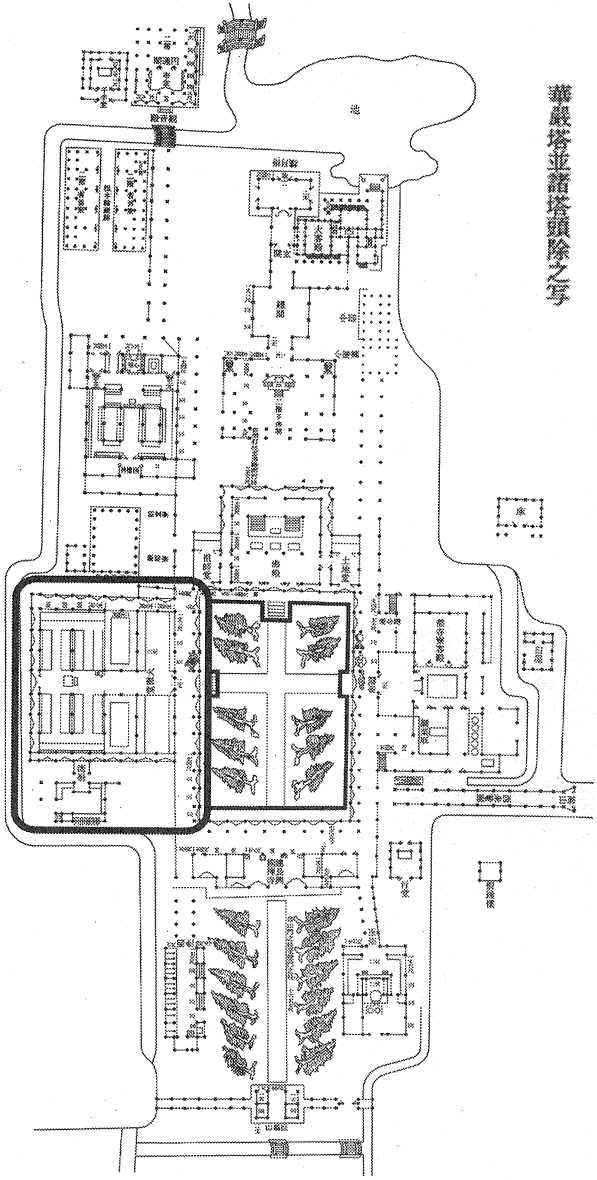

図4　「建長寺指図」起し（線で囲んだ部分に大徹堂が位置する。なお本図は『五山と禅院』所収の図に筆者が手を加えたものである）。

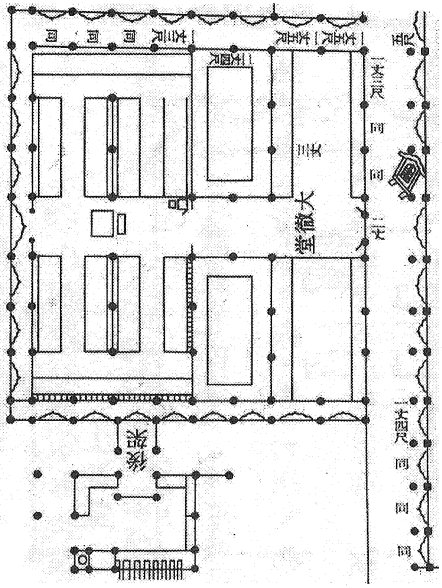

図５　「建長寺指図」起こし僧堂部分拡大

上述の成尋の日記や「五山十刹図」「大宋諸山図」がもたらされた後も、金山寺の情報はもたらされ続ける。その一例として、雪舟等楊が入明した際（一四六七―六九）に描いた「唐土勝景図巻」[23]と帰国後描いた「金山・育王山図」をあげることができる。

このような図は新たに入明する僧にも参照されており、例えば、杭州の西湖周辺の景観を見たときの策彦周良は[24]、旧年から海東においてその図を見ており、その感慨が大きいことを日記のなかで吐露している[25]。京都天竜寺の塔頭妙智院の三世である策彦周良は大内義隆の主導による二度の入明進貢（一五三八―四一、一五四七―四九）に参加し、その際の記録は日記『初渡集』『再渡記』を含め『策彦入明記』と総称され、今に伝わる。

金山図についても入明の際に持参していることがその日記から確認でき[26]、実際に訪れた。その記事にも伽藍の姿が記されている[27]。

・・・佛殿左方有小堂宇有達磨・百丈等像。又中央設座按開山像。像前有牌書以開山裴公祖師六字。又其次有方丈。横顔大徹二大字。額左脇書云、住山比丘圓悟立。方丈裡柱題句云、水月虚空相、山雲自在心。方丈左畔有泉。・・・

これによれば、仏殿の左に、祖師である達磨・百丈、開山

の裴公を祀る小堂宇に続いて方丈がたつ。そこには「大徹」の額が掛かり、その左脇には住持を務めた圜悟克勤が立てたと記される。また方丈の中の柱には、「水月虚空相」「山雲自在心」という句が記されている。そして方丈の左には泉がある。

つまり、当時の金山寺においては、仏殿の左に方丈として大徹堂があったという。仏殿との位置関係は一見、『金山志』の記述とまったく逆であるかのようである。しかしそれは『金山志』の記述が、大雄殿から正面を見て右手とするのに対し、策彦は正面から仏殿を見て左手としていることが、それぞれのほかの記述から推測できる。井と泉の位置関係を考え合せても、仏殿に対する方丈の位置に関する記述は一致している。

「大宋名藍図」に描かれる霊隠寺、天童寺、万年寺の伽藍図において、僧堂は仏殿に向かって左手に立っていることはすでに知られる。これを考えあわせば、策彦周良が訪れた際に方丈である大徹堂が仏殿の左にあることは、かつて大徹堂が僧堂であったことに由来するとも考えられる。

以上の金山寺大徹堂の変容をまとめると次のようになる。

熙寧五年（一〇七二）成尋が訪れた際には、すでに僧堂があり、「五山十刹図」「大宋諸山図」が記されたときには、僧堂が大徹堂と呼ばれていた。その後、嘉靖十九年（一五四〇）策彦周良が訪れたときには、方丈に「大徹」の額が掛けられ、圜悟克勤が立てたと記されており、その位置は仏殿に向かって左となる。つまり建築がそのまま転用されたかどうかは別として、かつての僧堂の位置を方丈が継承したといえる。

ではなぜこのような変化が起こったのかという点であるが、北宋から明代にかけて禅院における僧堂の重要性が低下するなかで、圜悟克勤建立という由緒をもつ大徹堂を残す方法として、方丈を新たに大徹堂とするという手法を採用したと推測する。

四―2．焦山寺

金山寺と同じく鎮江に位置する焦山寺でも、僧堂と方丈をめぐる変容がみられる。焦山寺については寺志として、清の同治四年（一八六五）に呉雲が撰した『焦山志』があり、「巻一　建置」では伽藍について述べられる。[28] 後世の編纂物という点は留意しておかなければならないが、ここまで見てきた例以外にも同様の事例があるという見通しを付けるためにも、ここに取り上げておきたい。

まず「方丈」の項をとりあげる。[29]

方丈、舊在大雄殿東、内有枯木堂。於乾隆三十年移建、於大雄殿西。舊爲玉峰庵。

これによれば方丈は、もとは大雄殿の東にあって、内に枯

木堂を有していた。乾隆三十年（一七六五）に、大雄殿の西に移建した。もとは玉峰庵としていた。ここで内に有していたとして挙げられる枯木堂であるが、『扶桑五山記』によると、浄慈寺の僧堂が枯木堂と呼ばれたことが知られる。次に「枯木堂」の項を引用する。[30]

枯木堂、在海雲堂左。宋釋枯木成建。萬歴庚寅都綱覺周・寺僧明一等重修、華亭唐文獻題選佛場額、王穉登書、釋宏恩題枯木堂額、久廃、

枯木堂は枯木法成が建立し、海雲堂の左にあるという。萬歴庚寅（十八年、一五九〇）都綱の覚周、寺僧の明一らが重修した。宏恩が題し、王穉登が書した「選仏場」の額が挙げられている。『鎌倉五山記』や『扶桑五山記』などには鎌倉の円覚寺の僧堂として「選仏場」が記されている。僧堂に類する衆僧が拠点とする堂宇と考えられるだろう。ただし、既に廃されているという。[31] 次に枯木堂の右にあるという「海雲堂」の項を引用する。

海雲堂、在大雄殿左、久廃。案新舊郡邑志俱云、海雲堂即方丈、舊藏有周鼎・玉佛・楊文襄公玉帶各一、鼎久失所、在知縣麗時雍訪得之、

海雲堂は、大雄殿の左にあり、すでに廃れているという。焦山寺は南面しており、大雄殿から見て左とすると海雲堂は東に位置するものと考えられる。また新旧の郡邑志によれば、海雲堂は方丈であるという。前にあげた「方丈」の項では、大雄殿の東にあったものが、乾隆三十年に西に移されていることを考えると、移築以前の方丈が海雲堂と呼ばれていたと解釈することができる。そして海雲堂と呼ばれる方丈と枯木堂とも呼ばれる選仏場が隣り合っていることわかる。

海雲堂については先に取り上げた策彦周良も記しており、やや長いがここに引用したい。[32]

…午刻。乘舟便遊焦山寺。舟行五里。中流有小島。曰羅山。樓門面于東。横掲焦山寺三大字。佛殿横顔大雄寶殿四字。殿裡按三世如來。左右有十六羅漢像。方丈横扁方丈二大字。堂裡正面横掲海雲堂三大字。青字。方丈門右方壁傍有石碑。鐫以焦山禪寺重建圓悟接待庵記十二字。記文不遑録。佛殿右方有焦光舊祠堂。門横掲隱士祠三大字。廟裡中央有遺像。像前有木牌。書漢隱士焦公之神七字。又面南有小門。横掲天開勝境四大字。出此門則西壁貼石額。横鐫海不揚波四大字。各上翠微攀磴路。南邊有快石。石上鐫浮玉二大字。此外石之奇快者多々。或鐫江山一覽四大字。或鐫醉石・劍石之字。又行少許而有小亭。面于西亭。裡中央北方横掲江山壯觀亭五大字。亭前有泉。上有石欄。欄上鐫東冷泉三字。過亭少許而有小亭。面于西。亭裡中央横掲三峯亭三大字過此亭攀磴路者少許而有石洞。横鐫三詔洞三大字。又洞中鐫于石以三詔洞三大字。

以朱装之。又躋攀者少許而善縁閣。閣之東南有磴徑。通絶頂。絶頂有二重亭。面于南。亭裡中央横掲吸江亭三大字。第一重額横掲壁立萬仞四大字。又此亭西邊又有堂宇。堂中横顔天風海濤四大字。脇有道人泉厓四字。寺中有諸寮舎。海雲庵・宝蓮庵・海峯庵・海門庵・朝陽庵・伍聖庵・一咲軒・水晶庵・佳處亭之類難盡記焉。本山類獅子形。曰獅子山。又隔江有山。曰象山。余偶作一詩八句遣之。　維纜焦山下。偶尋隱士蹤。暗潮藏嶼柳。空籟答岩松。魚散午時梵。鴉翻日暮鐘。留題強上壁。勝境罕重逢。就海雲堂有茶飯。山長以下三人光伴。小僧數人給仕。飯了各言歸。寺僧接武相送拏茶。茶罷出門。門送惜別。各上船。

これによれば嘉靖十九年（一五四〇）策彦が訪れた焦山寺には、楼門、方丈、焦光旧祠堂、江山壮観亭、善縁閣、吸江亭や諸寮舎があった。そして方丈内の正面に「海雲堂」の額が掲げられていることを確かめられ、海雲堂において茶飯が設けられた。

さらに『焦山志』「海西庵」の項を見ると次のようにある。[33]

海西庵、舊名漢隱庵、在天王殿西。明正德壬申、僧妙寧建。今改建焦公祠後。舊庵移入方丈、是爲雲水堂、

海西庵はもとの名を漢隱庵といい、天王殿の西にあり、明の正德壬申（七年、一五一二）僧の妙寧が建てたものであったが、現在は焦公祠の後に改建されているという。そしてもとの庵は方丈に移入し、雲水堂としているという。方丈の一角に雲水堂があるという記述は、はじめに挙げた方丈のなかに枯木堂があるという記述と一致するものであり、雲水堂と枯木堂が同じものである可能性も考えられる。

ここで焦山寺の枯木堂について整理すると、海雲堂と呼ばれる方丈とならび立っているとする場合と、方丈の中にあるとする場合の二通りの捉え方があることが知られる。おそらく、ひとつの建物を方丈と捉えるか、いくつかの建物の複合体を方丈と捉えるかという認識の差に起因する記述の差であろう。方丈と隣合うという点は、まさに霊谷寺の僧堂の隣に方丈が移されたのと同じ構成といえよう。

なお、焦山寺においては枯木堂が他にも存在しているようで、「大雄殿」の項に次のようにある。[34]

大雄殿、在天王殿後、唐枯木成禪師開山、中有枯木堂、宋了元、元聞叟、明覺初・宏衍、相繼修建、宏治中都綱妙福等復葺、而新之歳久寖頽、我朝康熙二十一年邑人高拱斗新安方成可重修、

大雄殿は天王殿の後にあり、枯木成禅師が開山した（唐とあるのは、宋の誤りであろう）ものであり、中に枯木堂がある。そして宋の了元、元の聞叟、明の覺初・宏衍が修建し、宏治年間（一四八八―一五〇五）には、都綱の妙福らが屋根

を葺き替え、その後、長らく廃れ、清の康熙二十一年（一六八二）邑人の高拱斗・新安・方成が重修している。大雄殿の中であること、開山について語られたくだりに続いて記されることから、ここに挙げられる枯木堂とは、開山である枯木法成をまつる開山堂と考えられる。

五、おわりに

以上、南京の天界寺、霊谷寺と鎮江の金山寺、焦山寺の四ヶ寺を取り上げ、元代以降の僧堂の変容に注目してきた。本稿で明らかにした事例をまとめると次のようになる。

まず天界寺では、元・至順元年（一三三〇）には僧堂が存在したが、早ければ明の初め（一三六八―）頃、禅堂と呼ばれる建築が建てられた。さらにその後、萬暦三十五年（一六〇七）には僧たちは各自がばらばらに暮らすようになっていた。霊谷寺では、元・泰定四年（一三二七）には大僧堂が存在したが、洪武十六年（一三八五）には禅堂と食堂が分立した。そして、食堂は庫院に、禅堂は方丈の近くに建てられた。

また金山寺は、宋・熙寧五年（一〇七二）に訪れた成尋が僧堂の様子を書き留めており、『大宋諸山図』（十三世紀）からもその存在が確認できる。しかし、明・嘉靖十八年（一五三九）に策彦が訪れた際には、大徹堂は僧堂が方丈へと転用されていた。そして、焦山寺では、方丈と僧堂が隣り合い、霊谷寺の状況と近かったと推測できる。また寺志の記述からは、方丈と僧堂の複合体全体を方丈と捉える事例が確認できた。

本稿でみた建築構成の変容の背景には、僧堂を中心とする衆僧の生活形態が変化し、方丈を中心とする住持のもとでの生活に移行したものと推測できないだろうか。また明代初期における僧堂の機能分化という現象は、日本の室町時代の事例と重なり、中国から日本へ積極的な摂取かどうかは別として、そのような生活形態の情報は背景にあったといえないだろうか。本稿で取り上げた事例は、あくまで断片的なものであり、他地域の事例なども含めてさらに広く検討する必要があり、今後の課題としたい。

注記

(1)「五山十刹図」、「大宋諸山図」については、横山秀哉『禅の建築』（彰国社、一九六七年）、石井修道「中国の五山十刹制度について―大乗寺所蔵寺伝五山十刹図を中心として―」（『印度学仏教学研究』第三十一巻第一号、一九八二年）、張十慶『五山十刹図与南宋江南禅寺』（東南大学出版社、二〇〇〇年）など参照。

(2)南宋代の禅院の僧堂については、横山秀哉「禅宗伽藍の殿堂」

（注（一）前掲書所収）、関口欣也『五山と禅院』（新編 名宝日本の美術十五、小学館、一九九一年）、韓志晩「韓国における桧巌寺跡の僧堂遺構について」（『日本建築学会計画系論文集』六〇二、二〇〇六年四月）など参照。

（3）拙稿「南北朝期の五山叢林における僧堂生活の実態」（『日本建築学会計画系論文集』六一一、二〇〇七年一月）。

（4）拙稿「海会寺における僧堂喪失後の修行空間」（『二〇〇五年度大会（近畿）学術講演梗概集 F―2』日本建築学会、三―四頁、二〇〇五年）、同「五山僧堂における僧衆の超過」（『二〇〇六年度大会（関東）学術講演梗概集 F―2』日本建築学会、四十一―四十二頁、二〇〇六年）参照。

（5）横山秀哉注（1）前掲書参照。

（6）『禅宗寺院建築布局初探』（明文書局、一九九一年）。日本における研究を参考にした通史的著述。この記述については、本稿においても触れることとする。

（7）張十慶『中国江南禅宗寺院建築』（湖北教育出版社、二〇〇二年）。

（8）なお、張十慶氏が作製した図は東方丈と西方丈の位置が『金陵梵刹志』所収の図と反転している。

（9）本稿においては、『金陵梵刹志一―四』（中国佛寺志三―六、明文書局、一九八〇年。）によった。以下で記す頁数は本書のものである。

（10）『金陵梵刹志　二』七四三―七四八頁。

（11）『金陵梵刹志　二』七四八―七五四頁。

（12）『金陵梵刹志　二』七七三―七七七頁。

（13）『全訳漢辞海第二版』（三省堂、二〇〇六年）「椽」の項参照。

（14）『金陵梵刹志　一』三三三―三三八頁。

（15）『金陵梵刹志　二』三三八―三四五頁。

（16）金山寺については、常盤大定・関野貞「金山 江天寺」（『中国文化史蹟 解説上』法蔵館、一九七五年）を参照。

（17）田中淡「作品解説 避暑山荘」（『世界美術大全集 東洋編 第九巻』一九九八年、三四七頁）。

（18）「大徹堂」（『金山志 一』、中国仏寺志彙刊第一輯第三十八冊、一九八〇年、一〇〇・一〇一頁）。

（19）『参天台五臺山記』については、島津草子『成尋阿闍梨母集・参天台五臺山記の研究』（大蔵出版、一九五九年）、平林文雄『参天台五臺山記校本並に研究』（風間書房、一九七八年）、藤善眞澄『参天台五臺山記の研究』（関西大学出版部、二〇〇六年）など参照。

（20）『参天台五臺山記』熙寧五年（一〇七二）八月十三日条。
・・・崇班子秀才來云、潤州大江中金山寺必可禮云々、杭州有三百六十寺、蘇州有三百六十石橋云々、・・・

（21）『参天台五臺山記』熙寧五年（一〇七二）九月一〇日条。

（22）「建長寺指図」や『扶桑五山記』などから確認できる。

（23）雪舟等楊については、『没後五百年特別展 雪舟』（毎日新聞社、二〇〇二年）、『雪舟等楊「雪舟への旅」展研究図録』（中央公論美術出版、二〇〇六年）など参照。

（24）策彦周良については、牧田諦亮編『策彦入明記の研究 上・下』（法蔵館、一九五五・一九五九年）などを参照。

（25）『初渡集』嘉靖十九年（一五四〇）九月三日条。
・・・未刻。自清波関出到西湖之涯。于山于水。佳絶可愛。六橋之影。湖心横幾虹。湖面或畫船・或漁舟不知予其數。所恨公程怱々。逐一不印屧於山隈水涯。三天竺・靈隱・浄慈等之諸寺。孤山・蘇境・六橋之烟景。如畫圖中物。但望梅林止渇耳。就中。孤山乃林和靖隱處也。至今三賢堂歸然存。

堂中塑白傅・東坡・和靖三像。所謂三賢是也。浄慈乃畫僧玉礪棲遲之寺也。七層塔影輝映山光水色。又上天竺之層塔。屹立于山之絶頂。余舊年在海東見其圖。今見其眞。頗増感慨。申刻。歸本船。

(26)『初渡集』嘉靖二十年（一五四一）二月三日条。
・・・刻后。得所命梅厓之墨蹟數枚。等澤畫金山圖投予。

(27)『初渡集』嘉靖十八年（一五三九）十二月三日条。

(28)なお本稿においては、『焦山志』（中国名山勝蹟志叢刊三二、文海出版社）によった。以下で記す頁数は本書のものである。

(29)『焦山志』九二頁。

(30)『焦山志』一〇二頁。

(31)『焦山志』一〇二頁。

(32)『初渡集』嘉靖十九年（一五四〇）八月五日条。

(33)『焦山志』九五頁。

(34)『焦山志』九〇頁。